実践！バリアフリー講座（1）
「聴こえないって、どんなこと？」
野崎 静枝氏
（本学兼任講師「日本手話1-4」担当）
細野 昌子氏
（本学兼任講師「日本手話1-4」担当，
筑波技術大学非常勤講師）
北川 光子氏

聴こえないって、どんなこと？（講演）

〇野崎　立教大学で日本手話の講義を担当しております、野崎と申します。私の家族は６人。聞こえるのは娘だけです。先日運動会があり、娘は「手話通訳の用意はできたの？」と私に聞くのです。小学校１年生であるにもかかわらず、そうやって家族のことを心配してくれるんだなと思って非常に温かい気持ちになりました。

手話を使って生活をしている聞こえない人たちを「ろう者」といいます。聞こえる人たちを「聴者」と呼びます。ろう者が集まる集団を「デフコミュニティ」といいます。

聞こえないといっても聴力が残っている「難聴者」もいます。中には多少電話ができる人もいます。デフコミュニティに関わっている難聴者の場合は手話がわかります。関わりのない難聴者には、手話がわからない人もいます。

「中途失聴者」は、病気などで、ある程度成長してから突然聞こえなくなる人のことです。中途失聴者にとっては手話を覚えることが非常に難しく、筆談などを使うということになるでしょうか。デフコミュニティに入って手話を少しずつ覚えてコミュニケーションがとれるようになるという人も中にはいます。

「盲ろう者」という人たちも全国で２万人近くいます。点字がわからず手話がわかる場合、触手話による通訳を受けます。見えなくなった後に聞こえなくなったなど、点字がわかる人は、指点字でコミュニケーションをとっています。

全ての聞こえない人たちは「聴覚しょうがい者」という１つの言葉でまとめられますが、聞こえない人たちの中にも様々な形があります。今日は、聴覚しょうがい者にとってのバリアとは何かについてお話ししたいと思います。

聞こえない人たちにとって、最近は本当に便利になりました。例えばLINEは、聞こえる友達ともコミュニケーションがとれ、聞こえる人たちの文化にも関わることができます。それから Skype。LINE でも Skype のような形でTV電話ができます。また、聞こえる人と電話をしたいときにはどうするか。例えば、子どもが突然熱を出して休むので連絡したい場合は、プラスヴォイスという代理電話サービスがあります。現在、LINEでもこのプラスヴォイスに依頼ができます。私の生活の中で、もしかするとバリアがもうほとんどなくなったのではないかと思うくらい、便利な社会になりました。昔のろう者の生活では、聞こえる学校に通っている子どもが熱を出した時には、隣の家に行き、子どもが今日は学校を休むので、学校に連絡してもらえませんかとわざわざお願いしなければなりません。気遣いが非常に大変だったと思います。

こんなに便利になった世の中でも、どうしても聞こえないと不便なこともあります。

例えば私は、聞こえる娘の小学校の関係者

ろう者が感じるバリアとは？

と話すときはバリアを感じます。聞こえないのは私１人。話の内容を知りたいんですが、わからないんです。そういう時はすごく苦しいです。

いくつか例を出しますね。ある人は、会社の人たちから誘われて一緒にお昼ご飯に行きます。でも、みんな手話ができないので、話して何か笑っているんだけれども、わからない。笑っているふりをしていても、聞こえないままでは苦しいな、合わせるのが難しいな、と思い始める。それでうつ病になり、自分だけでお昼を食べるようになる。自分の居場所が見つからないという状況になるわけです。

次の例は、会社の会議中の状況です。会議ではいろいろな意見が出てきますよね。隣の人に筆談をお願いしても、飛び交っている会話を全部書くというわけにはいかない。そんな中で、「あなた、意見は？」と途中で聞かれます。情報が全て入れば意見が出しやすいと思いますが、私が意見を言うと的外れじゃないかな、などの心配が多くて会議では孤立感を感じるのです。

さて次の例は、電車の中の話です。どこかの駅で降りなくてはいけない。最近はドアの上に電子表示が出ますが、ない電車もあります。乗り換えの時に、駅のホームの表示が、反対側から来た電車に遮られて見えず乗り過ごした経験があります。やっぱり聞こえないんだな、情報が全部届くわけではないんだな、と感じてしまうわけです。あと、突然の事故ってありますよね。車内放送がありますが、私には聞こえません。みんなが移動しているけれどもわからない。そういう時にバリアを感じます。

もう１つ他の例です。聞こえる人がある人に話しかけます。その人が「私、耳が聞こえません」というと、聞こえる人は「ああ、すみません、失礼しました」と立ち去ってしまうことが多い。聞こえないとわかって焦るわけです。コミュニケーションは無理なんだ、とバリアを作ってしまうということが起こります。私は外国旅行によく行きますが、外国では自分がろう者だと忘れることが多いです。多民族で構成された国は、言語的にすれ違っても身振りなどを使うことに慣れているからです。

アメリカでは、世界で初めてろう者の為の大学でろう学長が誕生し、「ろう者は聞こえないこと以外は何でもできる」と言いました。ただ、努力すればバリアが全部消えるかというとそうではありません。アメリカに行って、しょうがい者だから無理という、自分の心の中のバリアは消えましたが、今までお話しした例のように、自分だけでは解決できないわけです。ろう者が困ったと感じる時、それを聞こえる人が見て何かできることがあるかなと考えて、初めてバリアは消えるのではないでしょうか。ろう者に会って逃げ出すのではなくて、身ぶりや

筆談で対応するとか。手話ができる人の場合は、手話

学生生活でのバリアフリーについて

で会話が始まると、ろう者はすごくホッとします。相手が困っていたら、何かしましょうかと申し出る勇気が必要ですね。また、何に困っているのか見抜くことも必要です。そうなると、真のバリアフリーになっていくのではないでしょうか。相手が何に悩んでいるか、何をしてあげれば希望がもてるか、と相手の立場に立って察知する。その力が本当の意味での人間力ということになります。ろう者も、聞こえる人から助けてもらうだけではなくて、想像力を働かせながら、自分からも何かをしていく、お互いに歩み寄っていくことが必要だと思います。

今日は立教大学に在籍しているろう学生も来ていますので、バリアを感じることや、バリアフリーとはどういうことかをお話ししてもらおうと思います。

○大石　大石と申します。私の場合は、大学に入学して、同級生の皆さんからとても理解を得ています。いつも一緒にいる友達は、私のために手話を一生懸命覚えてくれています。とても嬉しいし本当に感謝していて、それによって大学生活が楽しい毎日になっています。情報保障でいろいろ助けてくださる方たちも増えています。それもとてもありがたいことです。

バリアを感じると言えば、まずサークルでのお食事会です。みんなが盛り上がっている時に、わざわざ筆談してもらうのもどうかなと思いますし、その会話になかなかついていけず、少し寂しい面もありました。でも、先輩がスマホなどを使ってコミュニケーションを図るようにしてくれたことがあり、そのおかげでとても助かりました。

もう１つは講義中に突然字幕なしの DVD が流されたことです。事前資料も先生の DVD 流すねという一言もありませんでした。パソコンテイカーさんが慌てて入力してくれたのですが、DVD は速くてテイクが追い付かず、情報が所々欠ける状態になってしまいました。そういう時にバリアを感じるのは正直なところです。

講義中には情報保障で２人がついてくれます。手話ができるテイカーさんとは手話で会話をしていますが、もう１人が手話でコミュニケーションできない場合に、手話での会話の内容がわからなくて、ちょっと苦しんでいる面があるんですね。今までの私と逆パターンです。ですから、聞こえる人も、手話の会話に入れないという疎外感を感じることがあるんだなと思いました。

○野崎　ありがとうございました。最後に、手話の魅力を皆さんに感じていただきたいので、『ミッキーマウスと魔法使いの弟子』を手話で表現したいと思います。**【手話劇】**皆さんいかがでしたでしょうか。最後に、立教大学をはじめ全国のあちこちでさらなるよい環境を目指していただきたいと思います。見ていただいて本当にありがとうござ

いました。

ノートテイク実践と情報保障について

○細野　細野と申します。立教大学で全学共通科目の中の言語教育科目として、つまり言語として、日本手話の授業が始まったのが 2010 年のことです。それ以来、日本手話の授業に関わってきております。

まず、大学の情報保障についてです。教員が講義をして、学生がメモをとりながら進むという授業が多い中で、聞こえない、聞こえにくい聴覚しょうがい学生にとって大事なのが、情報保障支援です。具体的には、ノートテイク、パソコンテイク、手話通訳、補聴システムなどが一般的です。それぞれについてお話します。

ノートテイクは、話し言葉を手書きで文字にするという支援ですが、テイクできる文字量は発話の約 20%と言われています。適応するのは、実習や視察などの移動型授業、数式や図を使う理系の授業及び語学の授業です。要約しながら行うので、支援学生は、ポイントをつかみ、文字を正確に早く書く力がつきます。

パソコンテイクは、話し言葉をパソコンに入力して、画面やスクリーンに呈示するという支援です。IPtalk という、無料ソフトを使って連携入力をすると、約 80%と情報量が大きく伸びます。支援学生は、正確でスピーディーな入力の訓練ができ、これは会社などに入ったらすぐに使える力となります。

手話通訳は、話し言葉を手話に変える聞き取り通訳及び手話を音声に変える読み取り通訳の二方向で行う支援です。慣れた通訳者の場合、80～95%の情報が伝わると言われています。ゼミやグループワーク、ディスカッションなどの授業に向きます。

最後に補聴システムは、軽い難聴の学生向けに音を増幅するという支援です。

新座キャンパスでの、ろう学生の情報保障の割合は、パソコンテイクが 81%、ノートテイクが 19%と伺いました。パソコンテイクは技術が要るので、これは驚くべき数字です。英語科目では、34%とノートテイクの割合が少し上がっています。パソコン入力は苦手でも、英語は好き・得意、あるいは、同じ先生の授業を受けたことがある、という方はぜひ、英語科目の支援もご協力いただければと思います。また、必要に応じて手話通訳を配置することもあると伺いました。

では、ノートテイクの実践に移りたいと思います。２分ほどのお話です。ノートテイクにはコツがありますので、後ほどコツについての説明をしてもらいます。その後、同じ内容で再挑戦していただきたいと思います。コツをつかめばできるかもしれない、という感触を持っていただければと思っています。では始めます。**【ノートテイク実践１】**

○親松　しょうがい学生支援室の、池袋でコーディネーターをしている親松です。皆さん一生懸命書いていて、すごく大変だったと思います。実際に私がノートテイクの学生を養成する時に伝えているポイントの一部を皆さんにお伝えしようと思います。

まず１つ目、略字や略語をつくる。２つ目、画数の多い漢字はひらがなもしくはカタカナで書く。３つ目、１行おきに書いていく。あえて余白を作るのは、後から訂正しやすくする、聴覚しょうがい学生が読みやすくするためです。４つ目、文末を簡潔に書く。

数字や人名や専門用語はテストに出たり

するものもありますので、必ず聞き漏らさずに書く必要があります。また、先ほどの皆さんのように、諦めず手を止めずに頑張って書く姿勢がとても大事です。

これからもう１回、細野先生に同じ内容を話してもらうのですが、ぜひ皆さんに略字を作っていただきたいと思います。「障害者差別解消法」は「〇にサ」。合理的配慮は「〇にゴ」。国連障害者権利条約は「〇にコ」。視野狭窄は「シヤ」。最後、しょうがいは「〇にシ」としてください。では２回目、略字を使いながらぜひ書いてみてください。

【ノートテイク実践２】

〇親松　皆さん、１回目と何か変化はありましたか。工夫次第で自分もできるんだと思っていただきたいなと思います。ぜひ今後参考にしてください。

〇細野　ここからは英語科目の情報保障についてです。立教大学でのディスカッションクラスに焦点を当てながら、どうしたらよりよい授業体制が整っていくのか、少し考えていきたいと思います。これはあるディスカッションクラスの教員の進め方ですが、まず宿題が出ます。その宿題の内容確認があり、それから、必要な表現練習などがあって、最終的にディスカッションをする。この授業では、コミュニケーションのスムーズさということも評価の対象になっているということです。そうすると、チームワークがすごく大事なんですよね。じゃあ、そのチームワークをどうやって作っていったらいいのかという話になります。

立教大学の語学教育では、「異文化理解」を深めるとともに、異なる文化に属するさまざまな人々とコミュニケーションを図る「言語運用能力」の修得を目指している、と伺いました。しょうがい学生とクラスを共有し、異文化理解を基盤にした言語運用能力を修得することは可能ですね。これは大きなチャンスですよね。例えば、ディスカッションをしているときに、ただ支援学生や教員の配慮に任せるのではなくて、積極的にクラスメイトと新しいコミュニケーション方法を見つけてみたらどうでしょうか。そのクラスにいる構成員一人一人が自覚を持って、何ができるかという発想になると、チームワークという意味ではとてもすばらしいものが生まれるのではないかと思っています。

支援の整った環境での学びを可能にするために、聴覚しょうがい学生は自分のニーズを伝えることが必要で、そのニーズも伝え方が大切ですよね。相手に支援してあげたいなと思ってもらえるようなコミュニケーション能力を持つ。そういうことも支援の構築の中に入ってきます。支援学生やクラスメイトにとっては、まずしょうがい学生と共にいるということで異文化理解ができ、支援の中で支援技能を自分で開発できる。プラスになりますね。教員にとっては、改めて自分の教材や授業運営の見直しをすることで、指導力アップになります。職員にとっては、大学運営能力のアップにつながります。立教大学に在学する学生全て、もちろんしょうがい学生も含めて、全ての学生が学ぶ権利の保障をするということは、大学および大学構成員全体の能力アップにつながるということが言えます。

私たち３人で日本手話を担当していますが、こういう大きな目的に関わっていけたらいいなと思っています。今後ともよろし

みんなに伝わるコミュニケーション方法を実践中

くお願いいたします。

コミュニケーション実践

【参加者を４つのグループに分け、手話が分かる人が３人・分からない人が２人のグループを２つ、グループ内の２人だけがポータブル音楽プレイヤーで音楽を大音量で流して聴こえない状態にしたグループを２つ作る。各グループで、「趣味」「夏にやりたいこと」「好きな食べ物」のテーマでコミュニケーションをとる。相手の伝えたいことがわからないときにどんなことを感じるのか。伝えるためにはどうすればいいのか。終了後、感想を聞いた。】

○木山　いろいろなことを工夫していただいたり、とても困っている方もお見受けしたのですが、せっかくなので感想をお聞きしたいと思います。

○学生　聴こえない状態だと、周りが一生懸命伝えようとしてくれていたんですが、わからなくて諦めてしまったんですね。何か聞くの悪いし、と思って話を次に流してもらったんですけれども、何か諦めてしまうなと思いました。

○職員　私以外全員、手話ができる方で、逆に皆さん手話で盛り上がって笑っているときに、自分だけそれに入れず、笑えずにいたところがあって、こういった経験をされているんだなというのは感じましたし、逆に伝わったときに、ああよかったなとすごく感じました。

○木山　ありがとうございます。もしかして、いつも聞こえる人間が多い中にいる聞こえない方と状況が逆になっていたかもしれないですね。でも、そんな時に伝わると、また喜びがあったり、会話をみんなでするという楽しさを改めて発見できたんじゃないかなと思います。

　これから学生の方は社会に出たり、職員の方も今後いろいろな場所で聴覚しょうがいのある方と出会う機会もあると思うので、そんな時に今日の講座のことが少しでも何かの助けになったら嬉しいなと思っています。これからもいろいろな立場の方とのコミュニケーションの大切さを考えていけたらなと私たちも思っています。野崎先生のお話にもあったように、お互いに歩み寄る気持ちがまず根本的にあることが大事なのかなと、見ながら感じました。これからもお互いに頑張りましょう。